

御殿雛

江戸時代に普及した雛飾りは、初期は毛氈に屏風を立てた「親王飾り」が一般的でした。その後、後期に入ると江戸で「段飾り」が発展する一方、上方（京・大坂）では「御殿飾り」が主流となります。

江戸後期の風俗を記した『守貞謾稿』には、当時の様子がこう記録されています。

「京坂の雛遊びは、壇二段ばかりに赤毛氈を掛け、上段には幅尺五六寸、高さも之と同じばかりの無屋根の御殿の形を居へ、殿中に夫婦一对の小雛を居へ、階下左右に隨身二人及び桜と橘の二樹を並べ飾るを普通とす」

御殿飾りは建物内に内裏雛を配し、官女や隨身などを添える様式で、御殿を御所の紫宸殿に見立てて桜と橘も飾られました。各人形の役割がわかりやすく、遊びの要素も備えています。

本品のように屋根を持たない姿は、「源氏物語絵巻」の「吹き抜き屋台」に似ていることから「源氏枿」と呼ばれました。